

発刊によせて

帯広の森の造成が始まった1975年、第1回目の市民植樹祭に、私も一人の市民として参加しました。

木材を生産するための森づくりは、30～40年の期間で考えるのが一般的です。しかし、帯広の森では、100年というさらに長い時間をかけて森をつくりあげる、しかも、いったん森を切り開いて畑となったところで再び森を育てていくと知り、その壮大な計画に心を打たれると同時に、その記念すべき第1回目の植樹に立ち会うことができ、たいへん嬉しく思いました。

その後、森を育てるイベントとして市民育樹祭も開催され、植樹祭と同様に、帯広の森づくりの恒例行事として定着しました。

毎年多くの市民および関係者の皆様のご参加とご協力によって、この市民植樹祭と市民育樹祭が連綿と継続されてきたことに、改めて感謝を申し上げます。

私たち市民は、森の成長とともにこの30余年を歩んできました。これまで市民参加の森づくりを支えてきた大きなイベントは終わりましたが、今後は、私たち一人ひとりが、日常の中で帯広の森と関わり、緑の大切さを改めて認識していくことが大切です。その延長上に、緑豊かな「田園都市」という帯広の都市像と、市民参加・協働による森づくり、まちづくりが実現されると信じています。

このたびまとめたこの小冊子が、これまでの森づくりの歩みを振り返り、今後のよりよい森づくりへとつながるきっかけになればと期待しています。

帯広の森市民植樹祭実行委員会
実行委員長 高橋 猛文

帯広の風物詩として定着していた森づくりイベント「市民植樹祭」が2004年に、そして「市民育樹祭」がその翌年05年に、それぞれ開催30回目と15回目の節目をもって終了しました。事業継続にご協力いただいた市民及び関係者の皆様には心から感謝し、敬意を表します。

帯広のまちを緑で囲む「100年の大計」のもと、1975年に始まった植樹祭。育樹祭はその16年後、市民に根付いた緑化意識を推し進め、植える森から育てる森への転換を図るべくスタートしました。帯広の森が市民により身近な存在となり、緑を大切にする気持ちを一層育む意義深い取り組みであったと考えます。

森づくりの2大事業が幕を閉じ、今後はこれまで醸成された市民意識をいかに維持・向上させるかが課題となります。ボランティア団体「帯広の森サポーターの会」の発足、市民の森づくりに対する支援要綱の策定など、市民協働の新たな息吹が感じられるのは心強い限りです。

また、環境保全活動の重要性が増す中、帯広の森にも憩いの場として以上の存在意義が期待されているといえます。IPCCがまとめた第4次評価報告書では、地球温暖化の原因を人間の経済活動にあると明言し、21世紀末の地球の気温が6度も上昇すると警告しています。

地球市民の1人として、私たちにはこの30年で培った緑化意識をさらに大きく育て、より素晴らしい帯広の森を未来に遺す努力が求められています。市民の皆様には、これまでと変わらぬ森づくりへのご理解とご協力をお願い致します。

帯広の森市民育樹祭実行委員会
実行委員長 林 光繁